

日韓文化交流基金 NEWS



Contents

01-03 日韓国交正常化50周年記念青少年交流公募事業
「GO! 2018総文祭 日韓アートアカデミー」研修事業
長野県野沢南高等学校長 宮本隆
日韓国交正常化50年、そして青少年交流
新羅大学校人文社会大学
外国語学部日語日文学科教授 崔光準

04-05 青少年事業
日本大学生訪韓団OBインタビュー
～OBが語る韓国の魅力、訪韓団の魅力～
06-07 助成・フェローシップ
2016年度助成対象事業決定
2016年度訪日・訪韓フェローシップ 採用者決定

08-09 フェロー研究紹介
3・1運動時期の「朝鮮人軍人」問題と
日本陸軍の対応
―帝国内の「統合」強化の側面から―
東京大学研究生 朴完
10-12 日韓文化交流基金事業報告

公益財団法人 日韓文化交流基金 〒105-0001 東京都港区虎ノ門5丁目12番1号 虎ノ門ワイコビル4F Tel:03-5472-4323 Fax:03-5472-4326

日韓国交正常化50周年記念青少年交流公募事業

外部の30団体による青少年交流事業が無事終了しました

日韓文化交流基金では、昨年度、日韓国交正常化50周年を記念して、青少年交流事業においては、例年韓国政府との間で実施している訪日・訪韓プログラムに加えて、日韓両国の青少年交流を行う団体向けの企画競争による公募事業を行いました。

日韓両国の青少年交流の企画競争公募には、数多くの応募をいただき、30団体の事業へ支援を行い、各団体による交流が実施されました。公募事業の内訳としては、招へい・派遣とも実施した事業が12件、招へいのみ実施が12件、派遣のみ実施が6件となりました。

招へいプログラムでは、韓国から計753名が来日し、東日本大震災の被災地を含む26都府県を訪問。派遣プログラムでは、640名が韓国を訪れ、それぞれ交流を行いました。

今号では、これまで詳細をご紹介できなかった事業の中から、「GO! 2018総文祭 日韓アートアカデミー」研修事業と日韓青少年古代文化交流地および万葉関連地域の探訪プログラムの2事業を取り上げご紹介します。



ソウル美術学院で先生を囲んで
（「GO! 2018総文祭 日韓アートアカデミー」研修事業）

訪日を前に万葉集に関する事前講義を受ける
（日韓青少年古代文化交流地および万葉関連地域の探訪プログラム）



「GO! 2018総文祭 日韓アートアカデミー」研修事業

長野県野沢南高等学校長
宮本隆

「日韓アートアカデミー」について

平成30年（2018年）に長野県で全国高等学校総合文化祭が開催されます。その際に国際交流部門では韓国の高校生の来日公演も計画されているため、事前の草の根交流を深めるべく長野県では高校生・教員相互の日韓交流事業を進めてきました。その事業の一環として、平成27年度は美術・工芸分野への進路を志す高校生の皆さんと教員がそれぞれ訪韓・訪日する相互交流が、日韓文化交流基金より支援を得て実施されました。

日本の高校生による韓国訪問

10月下旬に、長野県各地から参加した高校生20名と引率の教員で約1週間京畿道を訪問しました。その間、世界遺産や文化財の見学、韓国の高校生とのワークショップや共同制作、さらにホームステイなど数多くのプログラムを行いました。日韓関係の現状から訪韓に際して若干の不安があった生徒もいたようですが、実際に韓国を体験することで、事前の印象が覆された驚きや感激を味わった生徒がほとんどでした。「日本でメディアから受けていた韓国のイメージが大きく変わった」とか「実際に来てみないとわからないことがある」などの印象をもった生徒が多数でした。また、韓国の高校生宅へのホームステイや交流を通じて、韓国の生徒の皆さんの積極性や元気に刺激を受けた生徒も多くいました。

韓国の高校生による日本訪問

11月中旬には、京畿道の高校生が20名、引率の教員と共に被災地である宮城県仙台市・名取市周辺や都内の美術系大学、そして長野県を訪問しました。その際、長野県の国際系学科に学ぶ高校生が善光寺を案内し軽井沢高校では美術作品の共同制作などが行われました。特に軽井沢高校での活動では生徒の自由な発想のもと表現活動を行う授業手法について、韓国の美術担当の先生は驚きとともに感銘を持たれたようでした。受験競争などで夜遅くまで学校に残って勉強する韓国の高校生や教員にとって、日本の高校生の芸術文化活動は新鮮で大変興味深いものだった様子でした。また、長野県の高等学校総合文化祭を見学してもらい、来るべき平成30年度の全国総文祭のイメージも持ってもらうこともできました。

結びに

「この旅は“感動”でした。これらの体験から私が感じたこと、それは“これからの文化史”をつくるのは自分たちである」生徒の感想のひとつです。今回の交流は、参加した高校生そして教員に多くの感動を与えてくれました。このような機会をいただくことができ、この事業に関係したすべての皆様に御礼申し上げます。



01 韓国訪問で感じたことを新聞風の作品で表現（軽井沢高 清水末悠さん）

02 日韓学生による共同制作作品「ウォーターフォール」の前で

PROFILE

みやもと たかし
宮本隆

長野県野沢南高等学校長。専門教科は地理歴史（地理学）。今回の事業については長野県高等学校文化連盟の副会長として日韓アートアカデミー研修団長を務めた。



日韓国交正常化50年、 そして青少年交流

新羅大学校人文社会大学
外国語学部日語日文学科教授
崔光準

世間に心から尊敬でき好意が持てる人が、周囲に一体どれくらいいるだろうか。私が最も尊敬する方は日本の東京にいらっしゃいます。誰だとは話しにくいのですが、温和で、何事にも誠実で、本当に素晴らしい人間性で兄のような方です。その方との交流は30年以上前からなので、長い付き合いになります。昨年の3月にその方と東京で会って昼食をとった際、日韓国交正常化50周年記念事業の一部を日韓文化交流基金が中心となり行うということを知りました。学生たちに日本語や日本文化を講義して早30年、日韓青少年のために何かをしなければいけないという使命感が私の胸の内に湧き上がりました。しかしこれが苦勞の始まりとなりました。

いずれにしても基金の事業に応募し、2015年8月1日から9泊10日間のプランの承諾を得て実施することになりました。事業名は「日韓青少年古代文化交流地および万葉関連地域の探訪」。これを計画したのは、昨今良くない日韓関係が両国の国民に非常に歪曲され認識されるようになったので、古代日韓関係、特に『万葉集』を通して日韓関係が緊密であった時代の様子を若い学生たちに見せるためでした。また、2011年の東日本大震災により大きく被災した福島県を直接見て、被害がどれだけ大きかったのかを把握させ、日本を理解させようとする目的で始めました。事業実施が決定してからは、『万葉集』について講義を行う等、事前学習を徹底し、韓国全国から選抜された23名の学生と引率者を含む25名の訪問団は、8月1日から日本を訪問しました。

古代韓国と日本を往来していた航路を辿り福岡県の博多に到着した後、香椎宮、志賀島の金印発見推定地などを訪問しました。次に訪れた広島では原爆による被害がどれだけ大きかったのか、平和がどれだけ大切なのか、戦争がどれくらい無意味なことなのかを知る良い機会になったと思います。どんな理由であろうが戦争はいけないということを、戦争が起これば何も罪がない人々が被害を受けるということを実感しました。四国では『万葉集』第1期の代表的歌人、当時のエリート女人数田王の歌の舞台になった熟田津*と道後温泉を見て回りました。百済救援に大和を発ち27,000名の兵士たちとともに出征した斉明天皇とその当時の光景を想像してみました。歴史は流れましたが、1300年前の事件が目の前に浮かびました。660年の斉明天皇の百済救援はどのような理由からだったのでしょうか。百済救援が実現されたなら、今の東アジアはどのような姿になったであろうかという疑問も持つようになりました。大阪、京都、奈良の探訪も学生たちにはとても良い経験でした。大阪の四天王寺、京都の金閣寺、清水寺、そして、奈良の法隆寺、石舞台古墳では古代人の息吹が感じられました。津波と福島第一原発事故の被害地域である福島県南相馬市の訪問は難儀しました。南相馬市の桜井市長に連絡して訪問することになった後に、韓国では福島を含んだ6か所の地域の訪問を政府が禁止したからです。また、これに関連した、マスコミの影響は意外にも大きかったようです。マスコミが両国の友好のため

に報道するのではなく、良くないことだけを誇大報道した結果といえるでしょう。学生たちを引率して訪問した被災地の実状は思ったよりもはるかに深刻でした。未だ人々の出入りが解除されていない所まで入り現場を確認しました。復旧されていない家、10メートル以上の高さの津波の表示、そして、お年寄りだけの索漠とした通りや雰囲気、学生たちの表情は非常に真剣でした。南相馬市で行なわれた現況説明会においては多くの質問が飛び交いました。学生たちは日本を理解しようとし、同じ人間としての苦痛をともに感じ取ろうとする表情に見えました。名残を惜みつつ東京へと向かいました。訪日プログラム最後の日は高麗神社に寄りました。716年、高句麗移民1799名を東国へ移住させ、高麗都を作ったところです。古代韓国の関係は百済、新羅だけではなく、高句麗までも活発な交流をしていたことが確認できます。

昨年8月の9泊10日間は非常に暑かったです。猛暑にもかかわらず、よく付いてきてくれた学生に感謝します。また、基金の皆様にも感謝いたします。陰で黙々と働いている方々がいらっしゃるの、現在のような日韓関係が続いているのでしょうか。探訪の際には非常に大変でしたが、もっと大変なのは基金の皆様であることも感じました。もう二度としないとその時に考えましたが、終わってみると、それでも再度の機会があれば、企画して、引率して、若者に両国の交流のために最善を尽くしたいと叫びましょう。

*『熟田津に、船乗りせむと、月待てば、潮もかなひぬ、今は漕ぎ出でな』斉明6年(660年)、朝鮮半島の百済が、新羅と唐による侵略により日本に支援を求めてきた。斉明天皇がこの要請を受け、軍を出した際、額田王たちも一緒だったと言われている。



高麗神社にて(左端が筆者)

PROFILE

チェファンジュン
崔光準

新羅大学校人文社会大学外国語学部日語日文学科教授。万葉集についての研究および韓国国内での紹介など、多様な分野で日本との交流を進めている。



日本大学生訪韓団OBインタビュー ～OBが語る韓国の魅力、訪韓団の魅力～

当基金では中学生から高校生、大学生、教員の方を対象に青少年交流事業を実施しています。

その中でも今回は、1989年から行われている大学生訪韓プログラムについて、数多くの大学生訪韓団参加経験者の中から、1989年度、1994年度、2004年度にそれぞれ団員として参加し、各界で活躍されているOBの方に大学生訪韓団として韓国を訪れた当時の様子や大学生での訪韓経験がその後どのような役割を果たしたかなどについて、お話を伺いました。

江戸東京博物館都市歴史研究室 学芸員 市川寛明さん(1989年度参加)

私の専攻分野は歴史学であり、しかも日本近世史が専門だったため、それまで韓国とは全く無縁で、偶然の機会を得て大学生訪韓団に参加しました。また訪韓団に参加した89年当時は、今ほど学生たちが海外に頻繁に出かける時代でなかったため、私も海外渡航の経験に乏しく、韓国は貴重な海外体験の機会となりました。韓国については、歴史的経緯から「反日」感情が激しいというイメージくらいで、知らないことばかりの状態で訪韓団に参加しました。

訪韓団で現地を訪れて最初に感じたのは、公に禁止されていたにもかかわらず五輪真弓の「恋人よ」や安全地帯の歌が多くのの人々に愛唱されていることを知り、訪韓前に持っていた「反日」のイメージとのギャップを感じさせられました。それと、ホームステイ先での出来事ですが、年配のハルモニ（おばあさん）が同居しており、日本から来た私に日本語で、とても優しく話しかけてくれたことが印象的でした。

一方で、釜山大学を訪問した時に、九州地方から流れてくる日本のラジオ放送について、「これは日本による文化侵略だ」という発言を聞き、日韓の距離の近さを実感した反面、一方で対日感情の敏感さについても考えさせられました。

大学生訪韓団で韓国を初めて訪れてから25年以上が過ぎました。当初まったく韓国との関わりはなかったのですが、その後次々と韓国との関係が生まれ、現在につながっていきます。最初は江戸東京博物館に就職して5～6年たったことですが、東京学芸大学とソウル市立大学との歴史共同研究に参加する機会を得て、それが縁で2002年のソウル歴史博物館の開館記念シンポジウムに招待される

ことになりました。それがやがて北京首都博物館をふくめた日中韓国際博物館シンポジウムに発展していきます。最初は細々と始まった博物館同士の交流も今では東京都が推進する都市外交の一環に位置づけられるまでになり、私は博物館のなかで交流担当を勤めております。偶然参加した訪韓団を皮切りとした韓国との繋がりがも今では私の職務の大きな部分を占めるに至っているのですから、人生は不思議なものです。

今の学生へ伝えたいのは、韓国との交流の経験を通じて感じたのですが、人は互いに親しくなることで人間関係が築かれます。そうした人間関係があると、難しい問題で議論したとしても、建設的に議論を進めて、解決することが出来ます。そのためにも交流を通じて多くの人と親しくなってもらいたいと思います。また、歴史を学び、過去にあった事実をしっかりと見ることも忘れないでほしいです。



江戸東京博物館学芸員 市川寛明さん

福島大学経済経営学類 准教授 伊藤俊介さん(1994年度参加)

訪韓団参加当時、大学1年生で韓国語を専攻していましたが、当時は、まだ韓国についての情報が乏しく、現在よりも限られた情報媒体というフィルターを通して得たものでした。そんな中で、訪韓初日から韓国の人たちの温かさを実感する出来事がありました。

初日の公式日程が終わった後、夜の自由時間に訪韓団のメンバーと近くの南山へ散歩に出かけたのですが、ホテルに戻る道が判らな

くなってしまったのです。韓国語もまだ習い始めのためうまくできずにいて、近くを彷徨っていたところ、3人くらいの韓国の若者が道案内してくれたのです。しかも散歩にも付き合ってくれ、ホテルまで送ってくれました。初めて会った街中の韓国人の親切さにメンバー一同感動した覚えがあります。

また、訪韓団に参加して、今も印象に残っているのが、韓国・中央

大学と釜山女子大学の訪問やホームステイで、同世代の韓国の学生と触れ合ったことです。

韓国大学生との交流会では学校生活、勉強、就職活動、恋愛などこの年代共通の話題で盛り上がり、韓国の学生たちは好奇心旺盛、勉強熱心という印象を受けました。訪問先では、学生たちと住所交換をしたりして、初めての韓国訪問で多くの友だちができたことがとても嬉しかったです。

訪韓前は、これらの体験ができるとは思いつかなかったことでした。韓国について、それまでの私の知識がいかに一面的なものであったかを痛感し、私の中で、訪韓を契機に大きく韓国に対するイメージが変化したのが事実です。また、異文化理解や国際交流といった活動には元は消極的だったのですが、訪韓団参加を機に積極的になれ、当時の経験が現在の自分の研究活動や教育活動の原点になったのは間違いありません。

初の訪韓から20数年が経ち、韓国は急速な経済発展と都市化、先進技術の積極的な導入、生活・文化の多様化、国際社会への発信力の強化といった変化がある一方で、国民の政治への関心の高さや学生たちの勉学に熱心に取り組む姿勢は今も当時も変わらないと思います。

20数年前に団員として参加した大学生訪韓団に、縁あって今年の

3月に今回は学生を引率する団長として参加することになり、学生たちの交流の様子をみて、忘れかけていた初心を思い出した気がします。今の学生の皆さんには、日韓両国の間にはいまだに解決されていない問題を解消するために、「先入観や固定観念を捨て、自らの目で韓国を見て、自らの体で韓国を感じる」ことを実践してほしいです。訪韓団に参加して私も多くの経験をし、それらは今でも生き続けています。ぜひみなさんも日韓の架け橋としての第一歩を踏み出してください。



1994年の大学生訪韓団参加当時、ソウルタワー前での記念撮影
(後列左から4番目が伊藤俊介さん)

2016年3月、大学生訪韓団団長として参加、訪韓学生たちと共に
(中央が伊藤俊介さん)



関西エアポート株式会社航空営業部

大学2年在学中の秋に実施された大学生訪韓団での訪問が初めての韓国訪問でした。訪韓団参加後はプライベートで、大学時代よりその友情をはぐくみ、また、最近では韓国人の友人の結婚式に出席したりと多いときには年4回訪れたりもしています。韓国を訪れるとソウル市内を地下鉄で移動したりするのですが、地下鉄3号線と4号線の交わる忠武路駅を通ると、この駅の近くの家でホームステイした当時のことを思い出したりします。最近もホームステイ先の当時中学生だった男の子から、フェイスブックへ友達申請が来ました。彼は最近兵役を終えたようなことも書かれていて、時の流れとともに何だか成長が垣間見えて感慨深かったです。

韓国人の友人の付き合いもあり、日韓を行き来することが多くなり、ある時、韓国人の友人に何も告げずに韓国に行って、連絡もせず帰ってきたことがあって、その後、私が韓国を訪れたことを後から知った友人から「なぜ韓国に来るのに連絡もよこしてくれないの」と怒られました。他の韓国人の友人たちも同じ反応で、「韓国に来るなら連絡して」というのがありました。これが友情の表れなのかなと思った出来事です。

大学生訪韓団から始まった韓国の友人との付き合いを通して、「もてなす」、「困っていたら、助ける」、「懐に入れば、家族同然というような、優しさ」ということを経験し、「シンプルに人に優しくするって大事なんだ。そうすれば、お互い仲良くなるんだ」ということに気がつきました。

廣津諒平さん(2004年度参加)

それとこの大学生訪韓団では、日本全国津々浦々から来た同年代の学生たちと議論でき、多感な大学生の間に、多様な価値観、いろいろ考えている人たちと日韓の国籍問わず出会えて、それぞれが夢に向かって突き進んでいる姿を見ながら、私も感化されました。

私にとって「韓国」は公私ともに今や切っても切り離せないものになっています。それは何からはじまったか？訪韓団がきっかけというのも言えるかもしれませんが。訪韓団に参加して、縁が縁を呼んで、さらに縁を呼んでいると思います。もちろん自ら主体的に動くことも大事です。韓国社会にある「情」、「思いやり」も大事で、韓国の文化的要素も相まって、縁は縁を呼ぶと強く思います。そういう縁がきっかけで人生を豊かにしてくれます。



大学生訪韓団参加時、伝統衣装体験
(最後列右端が廣津諒平さん)

韓国の友人の結婚式にて
(左端が廣津諒平さん)



2016年度助成対象事業決定

2016年度助成対象事業には82件の申請があり、この中から38件への助成が決定しました。

●助成対象事業一覧(実施日時順)

事業名	申請団体	実施期間	場所
連続セミナー「だから“日中韓”一絆の再発見」	公益財団法人 日本国際交流センター	2016/4/1～2017/3/31	東京・国際文化会館
「高麗おどり」を210年ぶりに復活させる事業	有田町第三区	2016/4/1～2016/10/30	佐賀県有田町
チョン・ウォルソン プロデュース公演「華麗なる愛の調べ」	カラフネット	2016/4/27～2016/5/2	東京・HAKUJUホール
セラブレイ (Theraplay) ウィーク2016	NPO法人 日本セラブレイ協会	2016/4/30～2016/5/2	東京・北沢タウンホールほか
朝鮮通信使 祝祭 伝統文化交流事業	NPO法人 翔青会	2016/5/5～2016/5/9	釜山市・竜頭山公園、光復路一円
鳥取県文化団体連合会舞台分野・韓国江原道芸術文化団体総連合会との親善交流	鳥取県文化団体連合会 舞台分野 鳥取オペラ協会	2016/5/6～2016/5/10	鳥取・倉吉未来中心大ホール
日中韓における貧困と社会政策の研究	貧困研究会	2016/5/27～2016/5/29	大阪市立大学梅田サテライト
日韓学術共同セミナー「漢字文献の受容と学問の比較研究」	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫	2016/6/3～2016/6/5	慶應義塾大学三田キャンパス、宮内庁書陵部ほか
第15回東アジア国際シンポジウム	一般財団法人 東アジア総合研究所	2016/6/10～2016/6/11	東京・学士会館
福岡/釜山 演劇交流 HANARO project vol.3	福岡・釜山交流ひろば	①2016/6/14～2016/6/19 ②2016/6/27～2016/7/3	福岡・ぼんプラザホール、釜山・チョンチュンナビアートホール
韓国高校生交流事業	公益財団法人三重県国際交流財団	2016/6/中旬～2016/10/下旬	三重・県立昂学園高等学校、県立津商業高等学校、鳥羽志摩ほか
アーティスト・イン・レジデンス対馬2016	対馬アートファンタジア実行委員会	2016/7/1～2016/10/30	対馬厳原町
天草高等学校・韓国土坪高等学校相互ホームステイ交流事業	熊本県立天草高等学校育友会	①2016/7/7～2016/7/11 ②2016/10/13～2016/10/17	京畿道・土坪高校、ソウル、熊本・天草高校、熊本市
名護屋小学校 萬徳初等学校ホームステイ交流事業	名護屋小学校PTA	①2016/7/26～2016/7/28 ②2016/8/24～2016/8/27	佐賀県唐津市名護屋、全羅南道・萬徳初等学校
日韓高校生交流事業 “Youth Challenge”	NPO法人 グローバルプロジェクト推進機構	2016/8/1～2017/3/31	大阪市、奈良市、ソウル市
高校生による韓国・珍島との交流事業	今治ユネスコ協会	2016/8/2～2016/8/7	全羅南道珍島
第31回日韓学生会議夏季東京交流大会	第31回日韓学生会議	2016/8/5～2016/8/19	東京・国立オリンピック記念青少年総合センター
日韓共同学術会議	日韓共同学術会議実行委員会	2016/8/6～2016/8/8	兵庫・福崎町エルデホール
FICS 東京大学・ソウル大学校間学生交流事業 東京セッション	FICS Tokyo	2016/8/12～2016/8/17	東京大学本郷キャンパス、駒場キャンパスほか
日韓誠信学生通信使2016	早稲田大学留学センター	2016/8/16～2016/8/21	ソウル市、慶尚南道陝川郡、釜山市、大邱市
美しき青年 李秀賢 (イ・スヒョン) モイム2016 [アイモ2016]	社団法人 釜山韓日文化交流協会	2016/8/18～2016/8/21	釜山
神戸仁川芸術交流実行委員会	C.A.P. (NPO法人 芸術と計画会議)	2016/8/22～2016/10/31	仁川官洞ギャラリーほか
福岡インディペンデント映画祭 (FIDFF) 2016	福岡インディペンデント映画祭実行委員会	①2016/8/25～2016/8/30 ②2016/9/1～2016/9/4	福岡アジア美術館
近畿大学・東義中学校 建築都市デザイン国際交流PBLワークショップ	近畿大学建築学部堀口研究室	①2016/9/11～2016/9/17 ②2016/10/24～2016/10/27 ③2016/10/28～2016/11/2	東義中学校、近畿大学
GO!2018 総文祭プロジェクト 国際交流部門「日韓ダンスアカデミー」	長野県高等学校文化連盟国際交流委員会	①2016/9/15～2016/9/21 ②2016/10/25～2016/10/31	長野・松本市周辺、ソウル、京畿道ほか
高山映画祭 韓国映画特集	飛騨高山国際協会	2016/9/23～2016/9/25	飛騨・世界生活文化センター
さいたまトリエンナーレ2016 招聘アートプロジェクト ユン・ハンソル演劇作品	さいたまトリエンナーレ実行委員会	2016/9/24～2016/9/28	さいたま市・東武鉄道臨時列車内
日韓交流おまつり2016 in ソウル 栗コーダーカルテット派遣事業	栗コーダーカルテット&ビューティフルハミングバード	2016/9/29～2016/10/4	ソウル・COEXホールほか
「日韓交流おまつり2016 in Seoul」への虎舞参加	青森空港国際化促進協議会	2016/10/2	ソウル・COEX展示場

事業名	申請団体	実施期間	場所
朝鮮通信使ユネスコ記憶遺産セミナー	NPO法人 朝鮮通信使縁地連絡協議会	2016/10/2	京都市国際交流会館
「三國G」2016日韓東洋画交流展—Spaceless—	三國G実行委員会	2016/10/4～2016/10/10	ソウル大学校“ARTS RESEARCH CENTER” (WOOSUK Gallery)
日韓 小中学生によるESD(持続可能な開発のための教育) ワークショップ交流事業	NPO法人 箕面こどもの森学園	2016/10/14～2016/10/21	忠清南道錦山、ソウル
リバーリンク・プロジェクト2016(仮)	リバーリンクプロジェクト実行委員会	2016/10/16～2016/10/22	在大韓民国日本国大使館公報文化院
日韓演劇制作交流フォーラム	「おおいた日韓友好祭」実行委員会	2016/10/22	ホルトホール大分
海女サミット2016 in 志摩「伊勢志摩サミット開催記念～里海と海女～日韓の海女 志摩に集う」	海女振興協議会	2016/11/4～2016/11/5	志摩市内
韓国現代戯曲ドラマリーディングⅧ	日韓演劇交流センター	2017/1/23～2017/1/29	東京・座・高円寺
第12回大阪アジア映画祭 日韓映画交流プログラム	大阪映像文化振興事業実行委員会	2017/3/3～2017/3/12	大阪・ABCホール、梅田ブルック7ほか
「21世紀の朝鮮通信使～日韓文化交流・覇2017」	NPO法人 暮らしと耐震協議会	2017/3/10～2017/3/12	広島・福山市鞆の浦

2016年度訪日・訪韓フェローシップ 採用者決定

2016年度訪日・訪韓研究支援(フェローシップ)の採用者が決定しました。

訪日27名、訪韓6名の応募があり、このうち訪日フェローは5名、訪韓フェローは1名が採用されました。

●訪日フェロー

氏名	研究テーマ	所属機関	職位	受入機関	受入身分
梁起豪	日韓両国における移民国家論の現状と含意	聖公会大学校日本学科	教授	明治大学国際日本学部	外国人研究者(招聘教授)
姜喆九	中堅企業の成長と戦略に関する日韓比較研究	培材大学校日本学科	教授	東京経済大学コミュニケーション学部	客員研究員
康志賢	日本的襲名文化の研究—近世の大衆文芸と浮世絵を軸として—	全南大学校文化社会科学部国際学部日本学科	国際学部長・教授	法政大学国際日本学研究所	外国人客員研究員
金志宣	日本語教育における協働学習の実践研究—内省活性化に向けた実践的な授業デザイン—	梨花女子大学校人文科学部人文科学部日本語文化関係専攻	副教授	早稲田大学大学院日本語教育研究科	訪問学者
李文基	新羅の軍事制度の変化:故末松保和教授の新羅軍事史の研究と関連して	慶北大学校師範大学歴史学科	教授	学習院大学文学部史学科	客員研究員

●訪韓フェロー

氏名	研究テーマ	所属機関	職位	受入機関	受入身分
中根 隆行	朝鮮俳句をめぐる日韓文化交流史の研究	愛媛大学法文学部人文学科	教授	高麗大学校	外国人研究教授

3・1運動時期の「朝鮮人軍人」問題と日本陸軍の対応 —帝国内の「統合」強化の側面から—

東京大学研究生
朴完

フェロー研究紹介のページでは、各分野の日本研究、韓国研究をされている若手研究者による様々な見解や研究成果をご紹介します。今号では、2014年度に訪日フェローとして研究された朴完氏の研究内容についてご紹介します。

はじめに

筆者の研究テーマは、「現代の起点」と評される第一次世界大戦が日本に与えた影響と、それへの陸軍の対応、そしてその歴史的意義を総合的に考察することである。

大戦は、ヨーロッパの主戦場から遠く離れた日本にも大きな衝撃を与えた。しかもそれは、戦略・戦術や兵器などの純軍事的な次元を超えるものであった。第一に、国家の全領域を動員して最後まで戦う、「総力戦」という新しい戦争形態の出現により、兵士や労働者として動員される国民の国防面における重要性が飛躍的に高まった。第二に、革命や敗戦によりロシア、ドイツなどの帝政が次々と倒れるなど、「皇室の危機の時代」が到来した。第三に、大戦後の日本では、「大正デモクラシー」運動や平和思潮の隆盛が見られ、陸軍への国民の反感が高まる中で、軍が本来は最後の拠り所とすべき、「大元帥」大正天皇の健康状態は予断を許さないものとなった。以上のような、大戦のもたらした国内外情勢の変化により、陸軍もまた、国民や天皇（皇室）と自らの関係性を再定義する必要に迫られるようになっていった。

さらに、大戦の衝撃は、帝国と植民地との関係にも及んでいった。第一に、大戦中に提唱された民族自決主義の下で、ロシア、オーストリア-ハンガリーなどの帝国が解体され、その被支配民族は次々と独立を達成した。このことは日本支配下の朝鮮民衆を大きく鼓舞し、1919年の3・1独立運動へとつながった。第二に、インド、インドシナ、アフリカなどの人民が大戦中に動員された実例から、植民地人を戦争に動員できるほどの「同化」を達成することが、帝国支配の目標として改めて認識された。こうした大戦後の帝国支配秩序の動揺も、帝国内の「治安」維持の直接担当者である陸軍にとっては、看過できない問題であった。

これまで、日本の植民地朝鮮支配期における陸軍の役割については、主にその強圧的な側面が研究されてきた。しかし最近では、3・1運動当時の陸軍軍人の日記や意見書などから、後の「文化政治」の原型といえるものを読み取る研究も出てきた。そこで、日韓文化交流基金の訪日フェローシップ期間中は、これまであまり研究されてこなかった「朝鮮人軍人」問題に注目し、韓国併合前後から3・1運動後まで、彼らに対する陸軍中央及び出先軍の認識と対応を分析した。そこから大戦後の陸軍の植民地問題に対する新たな姿勢を確認するとともに、当時の内閣や総督府の朝鮮支配方針、「同化」観などとの関係を明らかにした。以下、その概要を紹介する。

1. 「朝鮮人軍人」とは

日露戦後、日本による植民地化の過程で、韓国の軍事力は次第に弱化し、ついに1907年にはほとんどの軍隊が解散された。しかし、この軍隊解散及び韓国併合（1910年）の後も、軍人または準軍人的な性格を持つ一部の朝鮮人たちは確かに存在していた。ここでは彼らを「朝鮮人軍人」と呼ぶこととする。

「朝鮮人軍人」には三つの部類があった。第一に朝鮮軍人とは、例えば旧韓国皇族の儀仗や王宮の守衛のため残された朝鮮歩兵隊のように、併合後も存続を許されたごく僅かな旧韓国軍人のことである（併合直後、約760人）。第二に朝鮮人将校とは、併合直前に日本に教育を委託され、併合後に日本陸軍の将校となった旧韓国武官学校学生である（1914～15年に計33人が任官）。第三に憲兵補助員とは、台湾や仏領インドシナの「土兵」制度をモデルとして併合直前に創設され、日本の憲兵隊の下で義兵や独立運動勢力の弾圧に従事したものである（約4,500人規模）。彼らは日韓併合の「合意・対等性」や、朝鮮人に対する「一視同仁」政策の象徴として、または日本の植民地朝鮮支配の実動兵力として併合後も存続が許され、日本陸軍軍人またはそれに準じて取り扱われるとされた。

しかし実は、彼らは「併合の副産物」と見なされ、内地人軍人と同一の待遇は受けられなかった。例えば朝鮮軍人と憲兵補助員の場合、その給与は内地人軍人とは別立てに決められ、金額面でも格差があった。また彼らは新規採用・進級・叙位叙勲・恩給などの面で制度の外に置かれていた。さらに陸軍は朝鮮軍人を自然消滅の方向へと導こうとし、朝鮮人に将校の門戸を開放することで朝鮮人将校を再生産する意思も持っていなかった。1918年になって朝鮮軍人の一部が併合以来初めて進級し、彼らに対する年金制度が用意されるなど、その待遇は若干改善された。しかしそこには限界があり、彼らに対する内閣や陸軍の態度は依然として冷淡だった。



図1：朝鮮歩兵隊の操縦を視察する英親王李垠（李王世子）と松川敏胤朝鮮駐節軍司令官（『毎日申報』1918年1月20日）

2. 3・1運動と「朝鮮人軍人」問題への注目

ところで3・1運動を控え、陸軍中央及び出先軍の新首脳として登場したのが、田中義一と宇都宮太郎である。特に宇都宮は欧米列強に対する日本と清国・韓国との「同盟」や「提携」を構想したことがあり、併合前から韓国軍人と親交があり、欧米植民地に関する知見も豊富だった。彼は朝鮮軍司令官として赴任した後、朝鮮支配における「朝鮮人軍人」の利用価値に気付いた。そこで田中陸軍大臣に対し、朝鮮人を国境守備隊や近衛兵として利用すること、朝鮮人将校を帝国統治により積極的に活用すること、朝鮮軍人の叙位叙勲・進級制度を用意することなどを建議した。

そして3・1運動が起こると、陸軍はこれを武力で弾圧し、その過程で堤岩里事件のように、多くの死傷者を出した。しかしこれを契機に、陸軍は従来の強硬一辺倒の政策の限界を感じ、朝鮮支配政策を見直すようになった。その中で「朝鮮人軍人」問題の解決は重要性を増すようになる。

例えば、宇都宮は運動鎮圧後に「朝鮮時局管見」という意見書を田中に提出し、朝鮮支配政策の転換を求めたが、特に「朝鮮人軍人」問題に関しては以下のように主張した—全ての帝国はその植民地人を軍事的に利用しており、それが不可能な帝国は決して成功できない。そこで将来、朝鮮で徴兵が行われる場合は、朝鮮人部隊に内地人部隊とともに対外戦争に従事させるのが究極の目標であり、その準備措置として朝鮮人志願兵部隊を編成すべきだ、と。すなわち、陸軍は3・1運動を契機に、将来朝鮮で徴兵を行えるほどの「同化」の達成を目指し、自らそれを促進する道を模索したが、その中で自らの手のすぐ届く「朝鮮人軍人」問題に改めて注目するようになったといえる。



図2：韓国併合直前、日本の陸軍中央幼年学校に在学中の韓国武官学校学生たち（前2列から、李基東「悲劇の軍人」1982年、巻頭写真）。併合後、彼らはそのまま日本陸軍の将校になったが、3・1運動後、その一部は陸軍を離れて独立運動に投身した。

3. 3・1運動後の対応様相

以上の経緯から、3・1運動後の陸軍は、田中と宇都宮の協力の下で「朝鮮人軍人」問題を解決し、彼らを媒介として帝国内の「統合」を強化するための一連の措置を取り始めた。それは「朝鮮人軍人」と内地人軍人との間の差別待遇を撤廃すること、朝鮮支配政策の中で彼らをより積極的に活用すること、日本陸軍の一員として彼らを帝国内に編入することであった。

具体的にみると、第一に、朝鮮軍人は、朝鮮総督府の政策や宇都宮の日韓「合同共存共栄」思想を朝鮮人民に宣伝するのに利用された。また給与や恩給面における従来の差別待遇が撤廃されるとともに、将校以上のものは日本陸軍軍人に正式に任用された。

第二に、朝鮮人将校は、内地から朝鮮に呼び戻され、朝鮮軍人と同様に利用されるとともに、朝鮮人に対する平等な待遇や「同化」を象徴する存在として新聞などで宣伝された。第三に、3・1運動前から民衆の非難の的となっていた憲兵補助員は憲兵補へと改編され、その規模も300人、さらに50人台へと縮小された。しかし「陸軍に属するもの」としての法的地位はより明確になり、陸軍の進級・給与・恩給制度の適用対象になったのである。



図3：憲兵補助員の卒業式に臨席した、その「生みの親」の明石元二郎朝鮮駐箚憲兵隊司令官（『毎日申報』1913年6月1日）。

おわりに—その意義と限界

以上のように、動揺する帝国支配秩序に対し単なる武力弾圧だけでなく、懷柔策をも駆使して自ら帝国内の「統合」の強化に乗り出した点で、大戦後の陸軍の植民地問題に対する新たな姿勢が確認できる。こうした陸軍の対応は、朝鮮人と内地人との間の待遇格差をなくそうとした点では、原敬首相の「内地延長主義」や斎藤実朝鮮総督の「文化政治」の方向と、また給与と恩給の大幅な増額によって「朝鮮人軍人」を懷柔する手法は、田中軍政のそれと一致するといえる。

しかし、そこにはもちろん限界もあった。3・1運動後、朝鮮軍人の将校以上や憲兵補などは日本陸軍の一員として帝国内に編入されたが、下士官以下は朝鮮軍人として取り残され、ついに解散された。また朝鮮人将校はその後新規採用されず、憲兵補も小規模にとどまるなど、「朝鮮人軍人」はそのまま凍結され、拡大再生産されることはなかった。これは植民地朝鮮支配の物理的基盤である陸軍に朝鮮人を入れることに対し、日本側に不安があったからであろう。結局、宇都宮の構想のように、朝鮮人を軍人として大量に採用し、内地人と並んで戦わせるためには、戦時期における人的資源の需要という、新たな契機を必要としたのである（朝鮮における陸軍特別志願兵令は1938年から施行）。

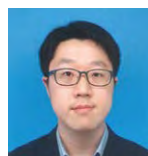


図4：朝鮮末期の最高軍令機構であり、植民地時代には朝鮮歩兵隊庁舎として使われた、三軍府総武堂の現在の姿（ソウル三仙公園内に位置、韓国民族文化大百科事典HPから）。

PROFILE

バクワン
朴完

1981年、釜山生まれ。専門は近代日本の政治軍事史。高麗大学校東洋史学科卒。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程を満期退学し、現在は同大学院研究生。主な論文は「大正七年帝国国防方針に関する小論」（2013年）など。



日韓文化交流基金事業報告

本号では、2015年度第4四半期（2016年1月1日から3月31日まで）の実施事業を紹介します。

1

青少年交流事業

●訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国青年 (大学生)	金粉淑(キム・ブンスク) 東亜大学校 国際学部日文学専攻教授	34	12	22	1/13~ 1/22	鹿児島県霧島市、熊本学園大学
韓国青年 (高校生第1団)	金有貞(キム・ユジョン) 凡物中学校 教師	36	7	29	1/13~ 1/22	高知県四万十市、高知県立中村高等学校
韓国青年 (高校生第2団)	李鍾實(イ・ジョンシル) 済州外国語高等学校 校長	36	8	28	1/13~ 1/22	高知県四万十市、高知県立中村高等学校
韓国青年 (大学生第1団)	梁起豪(ヤン・ギホ) 聖公會大学校日文学科 教授	33	10	23	1/26~ 2/4	長崎県南島原市、東洋大学
韓国青年 (大学生第2団)	鄭丞竣(チョン・スンジュン) 翰林聖心大学校観光日語科教授	32	11	21	1/26~ 2/4	長崎県南島原市、フェリス女学院大学
韓国青年 (大学生第3団)	裴晋影(ペ・ジンヨン) 白石大学校日本語学科 教授	29	9	20	1/26~ 2/4	長崎県南島原市、神奈川大学
韓国青年 (高校生第1団)	慎恵慈(シン・ヘジャ) 水原外国語高等学校 日本語教師	36	9	27	2/16~ 2/25	大分県豊後高田市、郁文館夢学園郁文館高等学校、大分県立高田高等学校
韓国青年 (高校生第2団)	李庚恩(イ・ギョンウン) 徳園女子高等学校 教師	36	7	29	2/16~ 2/25	愛媛県松山市、郁文館夢学園郁文館高等学校、愛媛大学
韓国青年 (高校生第3団)	李在英(イ・ジェヨン) 金川中学校 日本語教師	36	8	28	2/16~ 2/25	広島県江田島市、東京都立三鷹中等教育学校、広島県立大柿高等学校



カッオのたき作り体験(韓国青年訪問団 高校生第1・2団)



熊本学園大学の学生とディスカッション(韓国青年訪問団 大学生)



笑福亭銀瓶さん落語体験(韓国青年訪問団 大学生第1~3団)



ホームステイ家族と一緒に(韓国青年訪問団 大学生第2団)



能楽体験(韓国青年訪問団 高校生第2団)



金箔工芸体験(韓国青年訪問団 高校生第1団)

団体名	テーマ	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国中堅者（第1団）	日本の都市再生、地域振興	9	7	2	2/21～ 2/25	三重県、奈良県
韓国中堅者（第2団）	日本の地方の魅力と各地域における日韓交流の現状視察	9	6	3	3/7～ 3/11	青森県、大阪府
韓国中堅者（第3団）	日本文化	4	-	4	3/27～ 3/31	石川県、岐阜県
韓国中堅者（第4団）	地域活性化	6	5	1	3/27～ 3/31	徳島県、香川県

●訪韓団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
日本大学生（第1団）	吉本 一 東海大学湘南校舎外国語教育センター 准教授	20	7	13	3/1～ 3/10	中央大学校、梨花女子大学校
日本大学生（第2団）	伊藤 俊介 福島大学経済経営学類 准教授	20	5	15	3/15～ 3/24	慶熙大学校、三育大学校



- 01 バリアフリーツアーセンター訪問（韓国中堅者招へいプログラム 第1団）
- 02 高麗神社訪問（韓国中堅者招へいプログラム 第2団）
- 03 金沢ひがし茶屋街散策（韓国中堅者招へいプログラム 第3団）
- 04 葉っぱビジネス取材（韓国中堅者招へいプログラム 第4団）
- 05 K-POPダンス体験（日本大学生訪問団 第1団）
- 06 三育大学校訪問（日本大学生訪問団 第2団）

2 日韓文化交流基金 賛助会員制度

日韓文化交流基金は1983年の創立以来、両国国民間の相互理解と信頼を深めるため、青少年交流をはじめ数多くの事業を実施しております一方、賛助会員制度を設け助成事業や講演会開催など、趣旨に御賛同頂ける多くの方々の御支援を賜りながら、更なる事業活性化を図っております。

2015年度 賛助会員リスト（五十音順、敬称略。カッコ内の数字は2口以上の口数）

特別会員（9名）

稲葉真岐子 小野正昭 金春美 徐正基 武末純一 中江新 椿崎正博 広島県日韓親善協会 渡辺浩

個人会員（86名）

秋鹿敏雄	青野正明	秋月望	朝海和夫	朝倉敏夫	杉山長	千玄室	高田加代子	竹内宏	田中正敬
浅野豊美	阿部孝哉	天江喜七朗	李仁子	李炯喆	崔寧桓	月脚達彦	都恩珍	戸塚進也	中尾美知子
石川武敏	伊集院明夫	猪口孝	林在圭	内田富夫	中川聡	中塚明	中野照男	中山隆夫	並木正芳
梅田博之	江口愛	大竹洋子	荻野綱男	小倉紀蔵	芳賀徹	波田野節子	墨の美術館	濱崎道子	濱田耕策(2)
生越直樹	河村建夫	折野有紀	菅野修一	木畑洋一	浜之上幸	林史樹	福原裕二	藤本幸夫	藤原祥二
木宮正史	小泉勇治郎	日本民芸館館長	深澤直人	小林直人	堀泰三	馬定延	前田二生	松井貞夫(2)	三谷太郎
小針進(2)	高麗文康	齋木崇人	坂井俊樹	阪田恭代	三ツ井崇	茂木敏夫	守重知重	澤岡泰子	山口晃
酒匂康裕	櫻井浩	佐々木史郎	佐島顕子	鮫島章男(2)	山口奈穂	山根真理	油谷幸利	尹景徹	余田幸夫(2)
柴公也	十五代 沈壽官	上保敏	白川豊	須川英徳	柳震太	和田とも美			他 1 名

法人会員（2団体）

眞露株式会社(代表取締役社長楊仁集) 和光物産株式会社

〇お問い合わせ・資料のご請求 公益財団法人 日韓文化交流基金 Tel:03-5472-4323 Fax:03-5472-4326 E-mail:membership@jkcf.or.jp

2 刊行物のご案内

『ちょっといい話』
～日韓間の草の根交流に関するエピソード集～

2015年の日韓国交正常化50周年を記念して、当基金が外務省より委託を受け、日韓両国の草の根交流に関するエピソードを募集し、全国から寄せられた選り抜きの10話をまとめたエピソード集が完成しました。

『明日へ向かって』
～日韓国交正常化50周年事業記念誌～

日韓国交正常化50周年の記念の年であった2015年には、当基金では例年よりも規模を拡大し、また分野・内容にも趣向を凝らして多様な事業を実施しました。これらの事業について広く知っていただくために、事業の概要を紹介する記念誌を作成いたしました。



いずれも当基金ホームページよりPDFファイルにてご覧いただくことができます。

また、部数に限りがございますが、冊子でもお分けしていますので、ご希望の方は下記までご連絡下さい。(送料有料)

Email: webmaster@jkcf.or.jp 電話: 03-5472-4323

故竹内宏評議員を偲んで

当基金にて、1993年より評議員を務めた竹内宏静岡県立大学グローバル地域センター長(元長銀総合研究所理事長)が去る4月30日に逝去されました。

故竹内評議員は、経済評論家として、代表作「路地裏の経済学」他、多数の著作を執筆されたほか、1970年代には日本長期信用銀行の調査部長として、産業連関分析を利用して、新興韓国経済と日本経済を比較分析するなど、韓国経済分析の先駆けとして活躍されました。

1993年からは当基金評議員として、基金の運営や事業について多くの助言をいただいたほか、当基金会長をはじめとする基金役員や文化関係者で構成される韓国訪問団にも多数回参加され、韓国の各界関係者との交流を深められました。

2012年に実施された韓国訪問団での報告書から、故竹内評議員が遺された日韓文化交流基金フェローシップの研究テーマに関する文章要旨をご紹介します。謹んで故人のご冥福をお祈りいたします。

「東アジアは、歴史的な大変革を遂げ、世界を動かしています。それを推し進めているのは、主として中国と韓国の工業、ロシアのエネルギーです。日本は、多くの製造業の分野で韓国や中国に追い抜かれ、また電子工業では韓国と絶望的な格差が生じた上に、主要エネルギーの原子力を失いました。しかし、日本は高齢化社会の方向では数歩先を歩んでいます。高齢者の生活保障、高齢者・女子の労働力、介護等では、韓国が間もなく、中国が20年後に、見習うようになるはずです。これからの調査研究は、日本と韓国だけではなく、中国やロシアも含めた文化的・歴史的、人口構造的な観点に立って、日韓関係の将来を展望する大きなテーマが必要です」(『第28回日韓文化交流基金訪韓団報告』より)



表紙絵画紹介

『初夏の香り(油彩30号)』(作者: 檜崎正博)

春も終わり、日差しが強くなって木々はもはつらつとしてきて、暑い夏を予感させる情景です。日韓関係も明日は共に東アジアで、協調して輝きたいものと念じつつ画きました。

